

興福寺南大門の調査

—第 458 次

1 はじめに

第458次調査は、興福寺南大門の全面的な発掘調査である。興福寺第1期境内整備事業にともない、奈良文化財研究所は興福寺中金堂院の発掘調査を順次おこなってきた。1998年度に中門（第297次）、1999年度に東面回廊の北半と中金堂前庭部（第308次）、2000～2001年度に中金堂と北面回廊の一部（第325次）、2002年度に東面回廊・南面回廊の調査（第347次）を実施し、2004年度には南面回廊の一部を調査している（第369次）。なお、南大門の周辺では、1976年に防災設備設置工事にともなう部分的調査がおこなわれており、南大門の東西で基壇建物2棟、

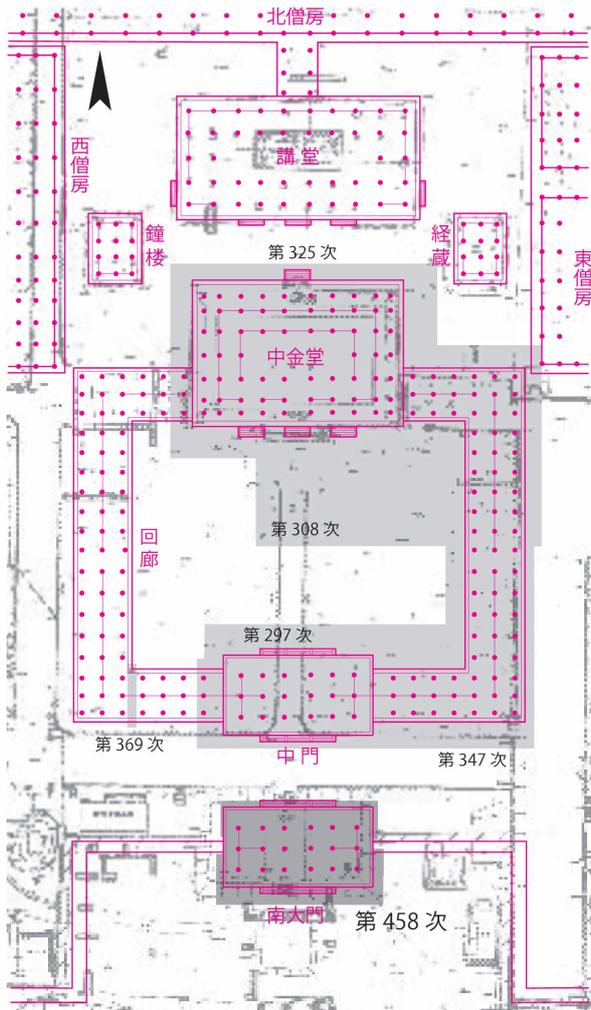


図209 第458次調査区位置図 1:1500

2 検出遺構

造営前の地形と整地

南大門の発掘調査で確認した基盤層は、硬くしまった黄褐色～赤褐色の礫層である。基盤層がもっとも高いのは調査区西北部で、その上面は標高約94.0mである。いっぽう、東南隅では地表面から3.0m（標高91.0m）まで掘り下げても基盤層を確認できなかった。西北部と東南隅との基盤層比高は3.0m以上で、実際はこれを大きく上回るであろう。つまり、南大門の東半には谷があったことがわかる。すぐ北側の中門（第297次）や東面回廊（第347次）でも、基壇造営前に埋め立てた谷を確認している。中門では基壇の東半分で谷を埋めており、南大門とは造営前の地形が似ている。このことから、回廊・中門と南大門の基壇下にある谷は一連である可能性が高い。

南大門の基壇は、上述の谷を厚い整地層で埋め、平坦地を造成した上で築成している。整地層は造営前の地形に応じ、北側・西側で薄く南側・東側で厚い。中央断割の南端部で、その厚さは約1.6mにおよび、これより東側でさらにその厚さを増すのが確実である。整地層上面の高さは調査区北辺で94.4m、同南辺では93.5mで、南側がなお90cm低い。

南大門

南大門SB9360 桁行5間×梁行2間の東西棟で、東西23.1m（78.0尺）、南北8.9m（30.0尺）に復原できる。柱間の寸法は、桁行の中央3間が4.7m（16.0尺）等間、両端の1間は4.5m（15.0尺）で、梁行は4.5m（15.0尺）等間である。中央の3間は門の通路にあたり、その幅は14.2m（48.0尺）である。

基壇 基壇の東西幅は東南隅の地覆石SX9384の東辺外面と、西端の地覆石抜取痕SX9385との距離から、30.8m（104.0尺）である。また、南北幅は北辺の地覆石SX9381と、東南隅の地覆石SX9384との距離から、南北16.6m（56.0尺）となる。

基壇の上面は土壌で覆われ、礎石や金剛力士像の台石は完全に埋没していた。礎石は上部が砕かれ、本来の高さをとどめない。また、礎石ハ4（後述）の根石が遺構

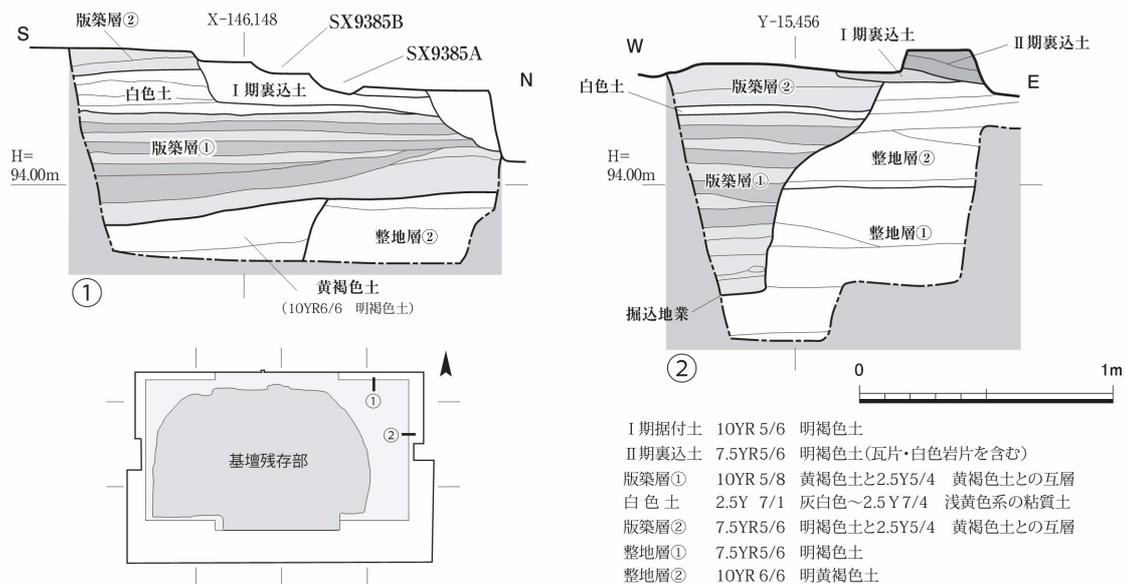


図210 掘込地業北端・東端断面図 1:30

検出面に露出し、基壇上面は削平を受けたとわかる。基壇上の遺構検出面は標高94.35～94.50mである。

南大門では基壇造成に先立ち、掘込地業をおこなっている。その規模は基壇のそれよりやや小さく、東西28.0m、南北15.2mである。このため、掘込地業の輪郭を平面で検出できたのは西北隅の一部で、北端・南端および東端は断割調査で確認したのみである。中央断割西壁の土層観察によると、掘込地業は整地層の上面からで、その深さは約50cmである。

南大門の基壇土は4つの単位からなる。下から黄褐色土(厚さ約50cm)、橙色土と灰色土との互層(版築層①;厚さ約110cm)、白色土(厚さ約20cm)、黄橙色土・灰色土の互層(版築層②;厚さ約55cm)である。礎石の据え付けレベルは、後述のように版築層②の中位である。

礎石とその抜取穴 基壇上では礎石とその抜取穴を15基検出した。記載の便宜上、東南隅の柱を基点とし、南から北へイ・ロ・ハ、東から西へ1～6と番付を与える。東端の柱列(イ1～ハ1)は削平のため消滅している。礎石がよく残るのはハ3～ハ5の計3基で、すべて花崗岩である。いずれも礎石上半は砕かれているが、据え替えの形跡はなく、創建期のものである。残余の礎石はほぼ完全に抜き取られるか、その一部を残すのみである。

断割調査により、礎石ハ4は版築層②を積み上げる過程で据え付けていることが判明した。白色土の約15cm上位、標高約95.2m付近に根石を据え、礎石とその根石(三

笠安山岩)の周囲を橙色粘質土で固める。礎石の据え付け後は版築層②をさらに重ね、礎石の下半を埋める。礎石据付穴は確認できない。

礎石抜取穴は不整形平面をもち、長径約2.2～3.5m。礎石ハ2・ハ6の抜取穴は遺構検出面から約90cmの深さがある。埋土は灰褐色土で、抜き取り時に破碎した花崗岩片や、もとは根石とみられる礫を含む。

南階段SX9405 版築層の南辺を垂直に切土したのち、新たに土を積んで南階段を造っている。階段の積土は瓦片・凝灰岩片や木炭を多く含み、基壇本体の版築層とはあきらかに土質が異なる。階段の幅は門の通路幅(14.3m)に等しい。階段の出はわずかに残った踏石(花崗岩)を最下段とみる場合、基壇南端から約1.2mとなる。

土坑SK9397～SK9404 基壇縁付近の断割調査などで検出した土坑。SK9397～SK9399は基壇北辺～東辺の断割調査で確認した土坑で、SK9397は基壇土を壊し、地獄谷溶結凝灰岩(以下、凝灰岩B)の地覆石裏込土に覆われる。SK9398・SK9399は掘込地業の東端付近に位置する。SK9400・SK9401は南階段SX9405の下位にあり、互いに関連する土坑とみられる。SK9402・SK9403は基壇西辺の断割調査で確認した土坑で、SK9402は凝灰岩Bの地覆石抜取痕跡の直下にある。版築層①を壊すが版築層②に覆われ、基壇築成の途中で掘削した穴である。SK9403は掘込地業の西端部で平面検出できた土坑である。SK9404は中央断割西壁の北端付近で検出し、掘込

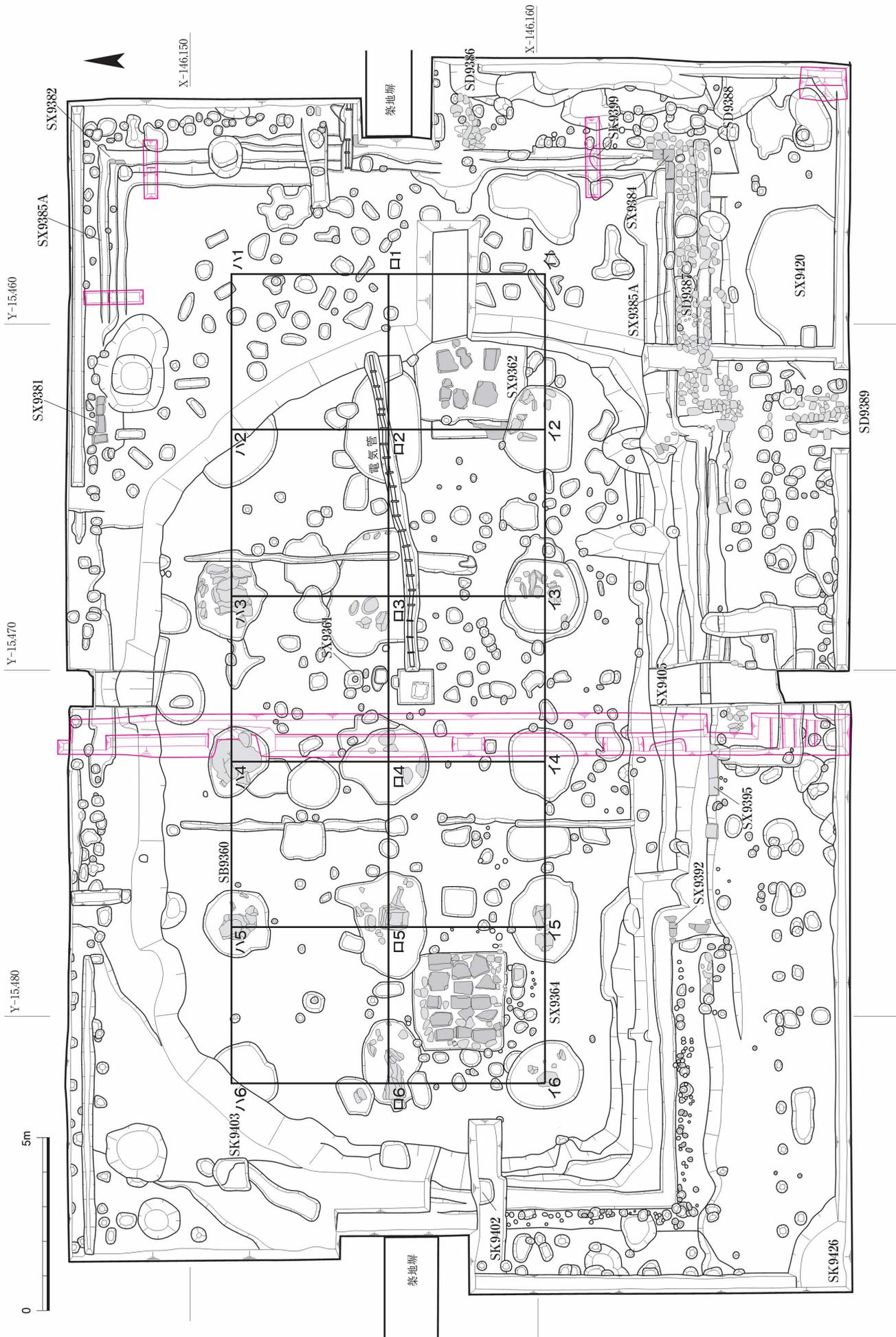


図211 第458次調査遺構平面図 1 : 150

地業の北端に位置する。

これらの土坑は掘込地業の南北端・東西端付近に位置し、SK9402・SK9403が凝灰岩Bの地覆石裏込土の下位にあるなど共通点が多く、基壇築造段階における一連の柱穴である可能性が高い。

鎮壇具埋納遺構SX9361 基壇のほぼ中心部に位置し、一辺約60cmの隅丸方形を呈する穴(図212)。この穴は中金堂院の中軸線上にあり、南大門の棟通り(基壇心)から北へ約90cmの位置を占める。検出面からの深さは50cm。埋土は黄褐色粘質土で、色調は基壇土のそれに近い。焼土、土器片・瓦片などは一切含まない。埋納穴の中心部からは鎮壇具容器(須恵器広口壺)が正位で出土した。

金剛力士像(阿形像)基礎SX9362 3間幅の通路の東側、棟通り柱筋の南側にあり、柱イ1・ロ1(ともに削平)・イ2・ロ2に囲まれる。据付穴は南北3.3m、東西2.5m以上である。据付穴の深さは台石の上面から約45cmで、埋土は土器片・瓦片および焼土・木炭を含む。東半は近代に削平を受け遺存せず、台石もわずかに6石を残すのみである。台石上面の高さは標高95.44～95.50mである。なお、据付穴の西側に残る凝灰岩は、金剛柵地覆石の可能性が高い。

金剛力士像(吽形像)基礎SX9364 3間幅の通路の西側、棟通り柱筋の南側に位置し、柱イ5・ロ5・イ6・ロ6に囲まれる(図213・214)。据付穴は一辺約2.8mの隅丸方形で、その内側に凝灰岩Bの切石を並べて金剛力士像の台石とし、その隙間は二上山産とみられる凝灰岩の岩塊

や安山岩礫・チャート礫で埋める。台石間には瓦片や木炭を含む暗褐色土が詰まるが、これは台石の設置後に嵌めた土である。この土から採取した木炭の¹⁴C年代は、10世紀前半(測定番号IAAA-92604～92606)と12世紀後半～13世紀初頭(IAAA-92608)とに分かれ、後者が文治3年(1187)の再建時の使用材とみられる。ここでは後者の年代を重視し、SX9364が建治3年(1277)の焼失時にはすでに存在し、文治3年の再建以前の設置と考える。

凝灰岩Bの台石は大きいもので15石を数え、いずれも被熱により赤色化した転用材である。多くは適当な大きさに打ち割ったもので、打割時のノミ痕とみられるくぼみを残す例もある。その一部は羽目石であったらしく、断面L字形の仕口をもつものがある。

基壇外装と雨落溝 南大門の基壇外装には、凝灰岩Bと花崗岩との2種の石材を確認した。前者は北階段の東側、基壇東北隅、基壇東南隅、南階段の西側などに、後者は南階段の一部に残るのみで、それ以外はすべて抜き取られている。抜き取跡は基壇の西北部以外に残り、重複関係などから凝灰岩Bが古く花崗岩が新しい。

地覆石SX9381・9382・9384・9392 凝灰岩Bの地覆石で、基壇東北部～東南部にかけて部分的に残る。SX9381は北階段の東入隅部の地覆石で、3石がL字形に並ぶ。基



図212 SX9361鎮壇具容器出土状況(北西から)

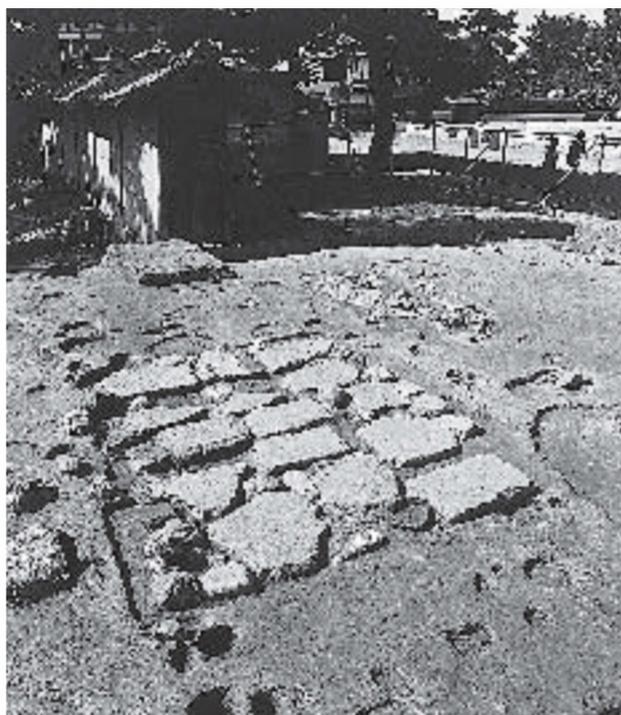


図213 SX9364検出状況(南東から)

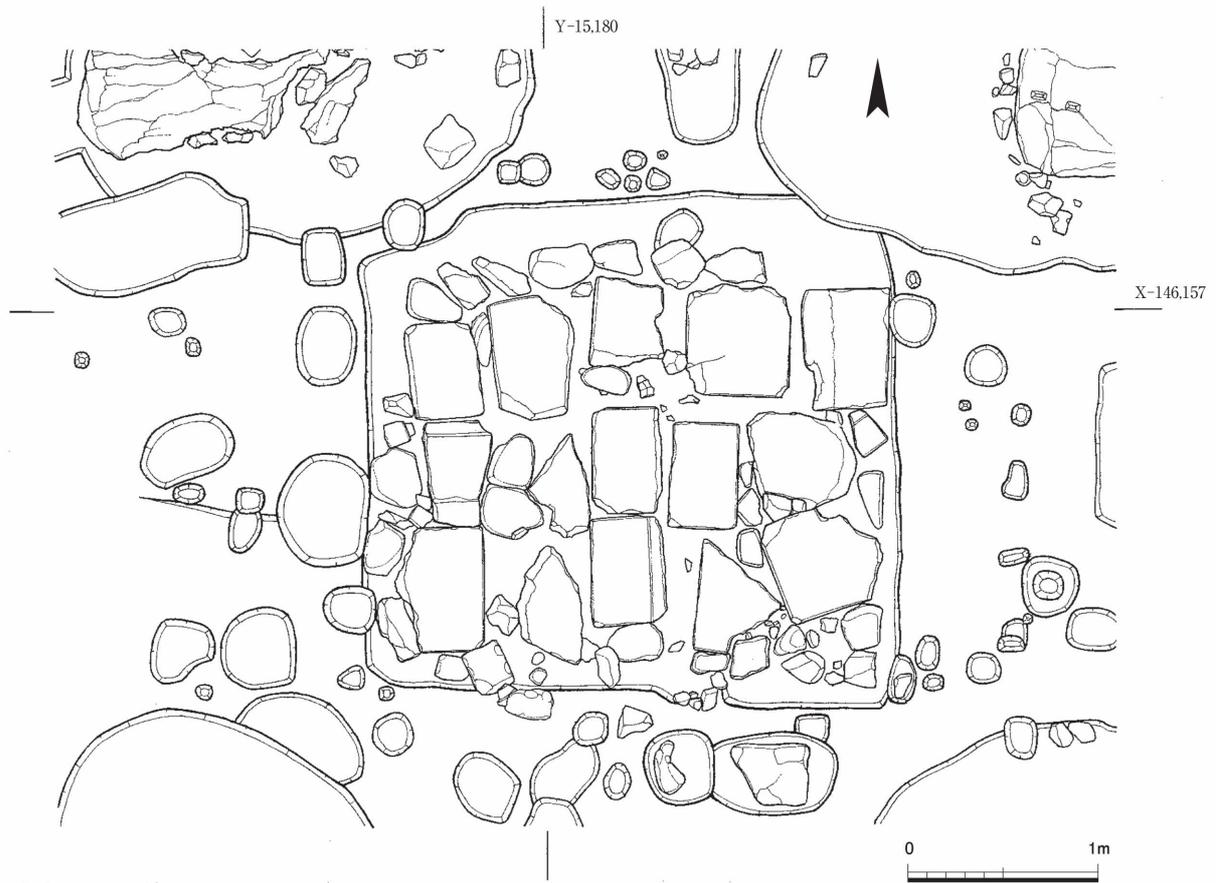


図214 金剛力士像（吽形像）の基礎SX9364 1 : 40

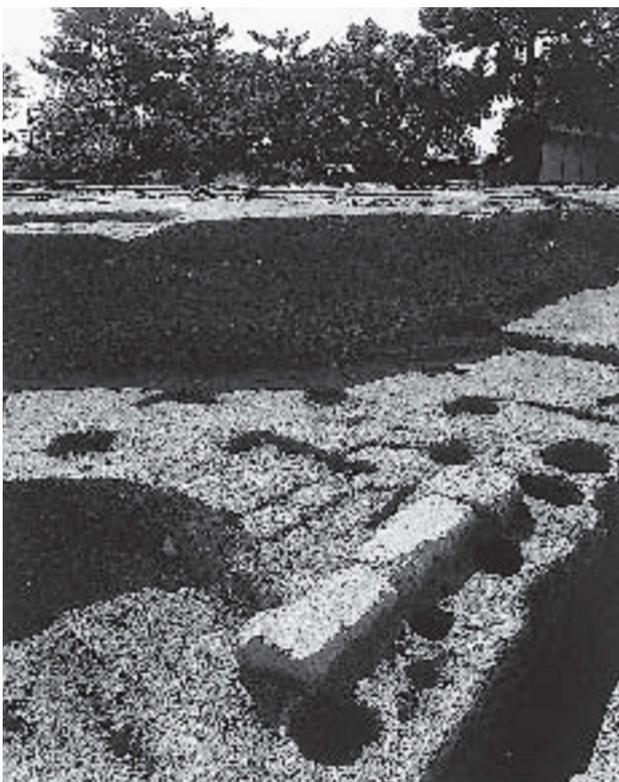


図215 地覆石SX9381（北東から）

壇北辺を縁取る2石は東西に並ぶが、羽目石との接合部付近は破碎されている。西端の1石のみが北折し、北階段の東端を示している。SX9382は基壇東北隅の地覆石で、1石分の破片がわずかに残る。SX9384は基壇東南隅の地覆石で、4石がL字形に並んでいる。橙褐色の裏込土が支持し、炭混じりの灰褐色土が覆う。SX9392は南階段の西入隅部の地覆石で、2石が残る。

地覆石抜取痕SX9385A 基壇東北部・東南部で検出した溝状の遺構で、凝灰岩Bの地覆石を抜き取った際の掘り込みである。埋土は灰色で、木炭片・凝灰岩B片を含む。木炭の¹⁴C年代は17世紀中葉を示し、この頃地覆石を撤去したとみられる。

石組溝SD9386 南大門の基壇に取り付く東築地塀の南雨落溝で、防災施設設置工事（1976年）で検出した南雨落溝とは一連の遺構である。河原石を2石並べて底石とする。その幅は約55cmで、上面の高さは標高約94.15mである。築地塀の地覆石を北の側石としたようだが、これは遺存しない。南に折れて南大門の雨落溝SD9387へと続くが、残るのはその曲折部のみである。



図216 地覆石SX9384・石組溝SD9387 (西から)

石組溝SD9387 基壇の玉石敷の雨落溝で、基壇東南端から南階段までの約7.5m分が残る。同時期に存在した地覆石SX9384の外側を縁取り、地覆石の上面からは約10cm下がる。底石は河原石を2～3石並べたもので、幅約55cm。底石の高さは93.93～94.04mで、西側が低い。

東西溝SD9388 雨落溝SD9387のすぐ南側にある東西溝で、その幅は約40cm。長径約40cmの河原石が落ち込む。石は原位置をとどめず、SD9387の側石を転倒させた溝の可能性はある。

石組溝SD9389 南大門の南階段東端から南へと延びる石組溝。雨落溝SD9387が南折したもので、1976年の防災施設設置工事でも検出している。東の側石は残存するが、西側のそれは抜き取られて残らない。溝の底石は安山岩などの河原石で、その幅は約60cm。側石の上面からの深さは約5cmである。なお、今次調査では確認できなかったが、南階段の西端から南へと延びる石組溝の痕跡が、防災施設設置工事時に見つかっている。

南階段踏石SX9395 南階段の南端部に残る花崗岩の踏石で、南階段の最下段とみる。残存するのはわずか2石で、それ以外はすべて抜き取られている。東側の踏石は長さ121.0cm、踏面の標高は94.28m。西側の踏石は長さ45.0cm、踏面の標高は94.30mである。

地覆石抜取痕SX9385 B 基壇縁をほぼ完周する幅40cm程度の溝状遺構で、花崗岩の地覆石を抜き取った際の掘り込みである。埋土は近代盛土(茶褐色土)に類似し花崗岩片・瓦片や木炭が多い。凝灰岩Bの地覆石抜取痕SX9385とはほぼ同位置にあるが、層位は上位である。

基壇外装の変遷 以上をまとめると、確認できる遺構にもとづく基壇外装の変遷は次のとおりとなる。

I期は、凝灰岩Bの地覆石SX9381・9382・9384・9392と、これらにともなう石組溝SD9387・SD9389の時期。地覆石は今回の調査で確認し得た最古のものである。地覆石の裏込土は橙褐色粘質土(I期裏込土)で、瓦片・土器片を含まず、木炭もごく少ない。南階段SX9405は積土内に多量の凝灰岩B片を含み、上掲の地覆石と同時期の築造とみられるが、大規模な改修を受けた形跡がなく、奈良時代まで遡る可能性がある。この場合、I期の上限は奈良創建時となろう。

II期は、花崗岩の基壇外装を用いる時期。花崗岩の地覆石はすべて撤去されているが、その裏込土が残存していた。II期裏込土は基壇東北部・東南部・南西部で確認した帯状の土層で、版築で築いた基壇の周囲をめぐり、I期裏込土を直接覆う。褐色土と暗褐色土の互層をなす部分もあり、木炭・瓦片が多い。II期開始の実年代は不明確だが、金剛力士像の台石が凝灰岩Bの転用材で、12世紀末の設置とみられることから、このときを一応の上限としたい。

III期は、花崗岩の基壇外装を撤去する時期。享保2年(1717)の焼失後にも壇正積基壇を描く資料(『大和名所図会』18世紀末)があり、基壇の破壊は幕末以後と考えることから、III期は明治期であろう。なお、南大門の基壇はこの時期に一度削平を受け、その後瓦混じりの盛土(茶褐色土)で土壇へと修築されたことが判明している。

その他の遺構

瓦廃棄土坑SK9426 調査区西南隅で検出した不整形の瓦廃棄土坑。土坑には平瓦・丸瓦が多く投棄され、埋土は赤褐色の焼土塊や木炭を多く含む。瓦の時期は奈良時代のものを中心に平安時代まであり、土坑は永承元年(1046)の焼失時に掘削されたと考えられる。

瓦溜SX9420 調査区東南部で検出した浅い瓦溜。南大門の東南方、南階段へと続く道路の東側にある。瓦層は厚さ約30cmで、多くの瓦が浅い窪地に堆積した状況のみ

せる。瓦は奈良時代のものが多く、平安時代のものを含む。埋土からは9世紀代の土器が出土している。

(森川 実)

3 出土遺物

瓦 磚 類

出土した瓦の時期は興福寺の創建期から近現代にまで至る。軒瓦の数量からいえば、奈良時代の瓦はもっとも少なく、平安時代以降江戸時代までの瓦が多い。このことは、特に永承元年(1046)の火災後に頻発する焼失・再建の歴史を物語る。以下、遺跡の解釈に深く関係する事実と、特異な技法痕跡をもつ奈良時代の瓦について報告する。

奈良時代では、興福寺創建瓦とされる6301Aと6671Aの組み合わせが過半を占める。6671には他にE・L種がある。6282Hや東大寺式6235J、久米寺式6561Aも少数含まれる。奈良時代の瓦の多くはSK9420やSK9426から出土した。なお、多くの焼土を含む両土坑は、平安時代の軒平瓦を包含していたので、永承火災以後、治承4年(1180)の兵火までの廃棄土坑と思われる。

特筆すべきなのは、基壇版築土中から出土した6671Eである(図217-1)。破片ながら、下外区の鋸歯文の特徴等から型式特定が可能であり、かつ段顎が短いという特徴をもつ。このタイプの瓦は次のような編年の位置を与えられている。すなわち、養老4年(720)の「造興福寺

仏殿司」設置により平城宮内に現れた長い段顎の6671B型式が、長い段顎の6671A型式からの影響で成立したならば、6671A型式の段顎が短小化ないし消失するのは同年以後のことと推定する根拠になり得る。だとすれば、短い段顎の6671E型式の年代も720年以後に降る可能性が高い(『平城報告Ⅻ』317頁)。6671Eは南大門基壇版築土基底部から出土しているの、創建年代を考える上で重要な意味をもつ。

また、今回の調査では、図217-2に示すような特殊丸瓦が、同じくSK9426より2点出土した。残存長142mm、残存幅95mm、残存部最大厚16mmで、図化した1点は焼成もよく暗灰色を呈する。狭端・側縁はヘラケズリが施されている。玉縁をもたない。

特異なのは両面に残された痕跡である。凸面には縄叩き痕が螺旋状にめぐる。しかも、縄目が通常よりはるかに太い。叩き目は下半部ではヘラナデで消されている。いっぽう、凹面には布目ではないが植物質の繊維痕が深く刻み込まれている。縦方向に走る繊維痕跡がとりわけ深いので、布糸よりも太い、例えば木ないしは竹等の痕跡かと推測される。これに直交して断続的な横糸痕跡が走っており、縦方向の素材を綴じ合わせている。以上の

表15 第458次調査 出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		軒棧瓦	
型式	点数	型式	点数	型式	点数
6235	J 1	6561	A 1	近世	1
	? 3	6671	A 9	近世後半	6
6282	H 1		E 1		
6301	A 13		L 4	軒棧瓦計	7
	? 3		? 4		
巴(鎌倉)	15	奈良	2	道具瓦 点数	
巴(室町前半)	1	平安	34	鬼瓦	3
巴(室町)	3	鎌倉	11	面戸瓦	31
巴(中世)	49	室町前半	1	雁振瓦	6(1)
巴(江戸後半)	6	室町	33	鳥衾	2
巴(江戸)	3	室町~近世初	1	鬘斗瓦(箱・割含む)	25
巴(小片)	13	中世	29	隅切丸瓦	3
菊丸(江戸)	1	中世(刻印付)	2	隅切平瓦	9
平安	23	中近世	2	特殊丸瓦	3
鎌倉	1	江戸後半	47	特殊平瓦	1
室町以降	1	江戸	19	完形丸瓦	3
中世	14	江戸(刻印付)	4	完形平瓦	5
中近世	3	近世以降	1	谷丸瓦	1
江戸	26	型式不明	24	釉付平瓦	2
江戸(刻印付)	2			平瓦(タタキ)	3
江戸後半	33			丸瓦(タタキ)	1
近現代	1			刻印付丸瓦	35
型式不明	40			刻印付平瓦	47
				ヘラ書平瓦	1
				緑釉磚	1
				伏間瓦	42(9)
				水返し	2
				瓦製門盤	5
				道具瓦(用途不明)	9
				土管	7
				※カッコ内は刻印付	
軒丸瓦計	256	軒平瓦計	229	道具瓦計	247
	丸瓦		平瓦		凝灰岩
重量	1465.16kg	4171.16kg	5.275kg	10.909kg	0.706kg
点数	8538	35418	3	100	10
					レンガ

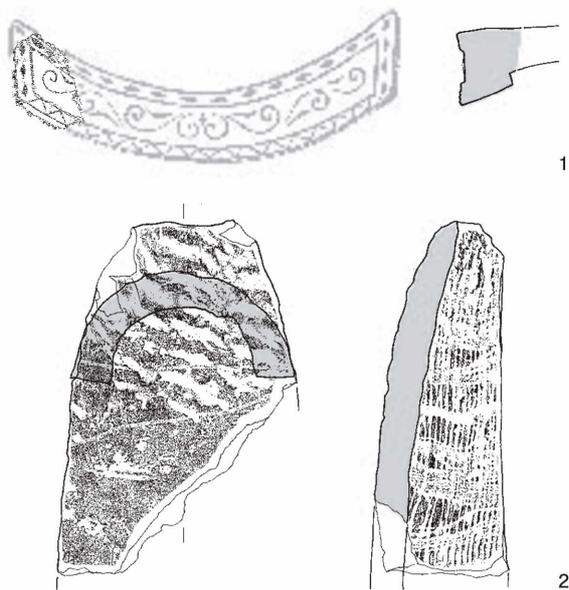


図217 6671E (1, 1:6) と特殊丸瓦 (2, 1:3)

特徴から推測されるのは、「巻簾」のような構造をもったものであろうか。凹面狭端付近には、恐らくこの「巻簾」を狭端側に引き出した際に残されたような擦痕がみられるため、この構造体が瓦部と模骨との間に、布と同じように張り付けられていたことがわかる。(森先一貴)

土器

土器・陶磁器は整理箱で14箱分が出土したが、半数は表土および近代盛土(茶褐色土)からの出土である。

図218は、鎮壇具埋納遺構SX9361から出土した須恵器広口壺(壺Q)で、鎮壇具容器に用いたものである。口頸部は基部が太く、外彎して外上方に広がり、口縁端部は小さくつまみ上げている。口径と体部最大径とでは前者がやや大きい。体部上半に明瞭な稜線をもち、下半はロクロケズリで整える。高台は外反し、端部が尖っている。奈良時代前半であろう。

このほか、瓦溜SX6420では9世紀前半の土器が出土している。土師器は細片が多く保存状態が悪いが、杯A、椀A、皿A、皿C、盤、高杯、甕がある。食器類にはc手法のものが多く、杯、皿、椀にはヨコナデで仕上げたものもある。黒色土器A類の破片には、杯A・杯Bの双方がある。須恵器は少数の杯Bとその蓋、壺M、鉢の破片があるのみである。(森川)

金属製品・銭貨

金属製品 金銅製品には紐金具、鶏形製品、銅製品には巡方、銅鋌、キセルなどがあり、鉄製品には、釘(折釘・円頭釘)や鏝などがある。

金銅製の紐金具は、鑲台と鑲からなる。鑲台は切り形で、裏面に鑲座金具との接合痕跡が見える。鑲は楕円形に作られ、最大径は5.2cmである。鶏形製品は、全体長

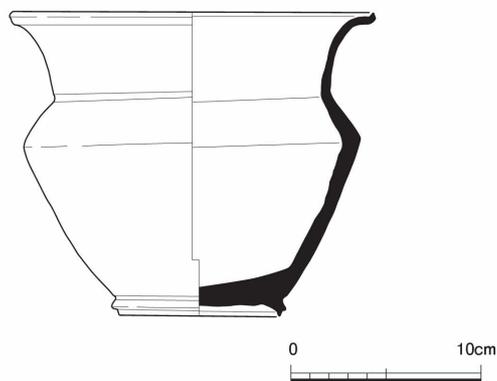


図218 SX9361出土須恵器広口壺 1:4

1cmである。目や鶏冠、羽毛などが毛彫りで細かく表現される。欠損しているが、底面には鋌足が鋳出されており、何らかの付属品と考えられる。

銅製巡方は平板形式の表金具である。現寸法は横3.0cm、縦2.5cm、厚さ0.25cmで、透孔の寸法は横2.1cm、縦0.6cmである。表土より出土した。

銭貨 茶褐色土、灰褐色土などから89点の銭貨が出土した。寛永通宝が42点ともっとも多く、その他に文久永宝や近代の銀貨、銅貨がある。

SX9361出土鎮壇具容器の内容物

調査経過 SX9361から出土した須恵器広口壺は、出土位置や状況から発見時より地鎮具と推測された。出土した時点で、壺内には土が詰まっており、内部調査が必要であった。埋土除去に先立って、X線透過撮影および高エネルギーX線CTスキャンによって内部調査をおこなった結果、壺の底面に、和同開珎5枚とガラス玉13点が存在することを確認した。それと同時に、壺内埋土の断面画像に3つに区分できる濃淡があって、それは土質の違いを示しているものと予想された(巻頭図版6)。調査過程で、この濃淡が予想通り土質の違いと対応することが判明したため、上から1・2・3層と名称を付した。

1層は、非常に固くしまる黄褐色粘質土。2層は、しまりがない黄褐色細砂。1・2層では遺物の出土は皆無であった。3層は、炭化物、魚類遺存体、植物質有機物片などを含む黄褐色細砂。土器底部から高さ5cmほどのところからそれらが出土しはじめ、銭貨上面まで続く。

3層における遺物分布 3層で確認された遺物(遺存体)は、炭化物、魚類遺存体、茶褐色有機物(植物質)、絹織物片、和同開珎、ガラス玉である。これらはおよその順序で見つかり、平面分布に差があった。炭化物は、上方では土器内面に沿って、下方ではほぼ全体に広がる。これとほぼ同じ場所に魚類遺存体が分布する。一部で密集部を形成しており、中央部からやや右寄りにかけて鱗の破片が、下部では頭骨片が分布する(図219-1)。魚類遺存体の下層には茶褐色有機物が見え、その下層にある銭貨を覆うように分布する(図219-2)。茶褐色有機物と同レベルで、中央やや左寄りに白色有機物片が分布する。この下層に銭貨、ガラス玉がある。銭貨上面には繊維状の有機物が付着し、銭貨に密着した状態で銅イオンによって緑化した1~2mmの織物片が数点ある(図219-3)。

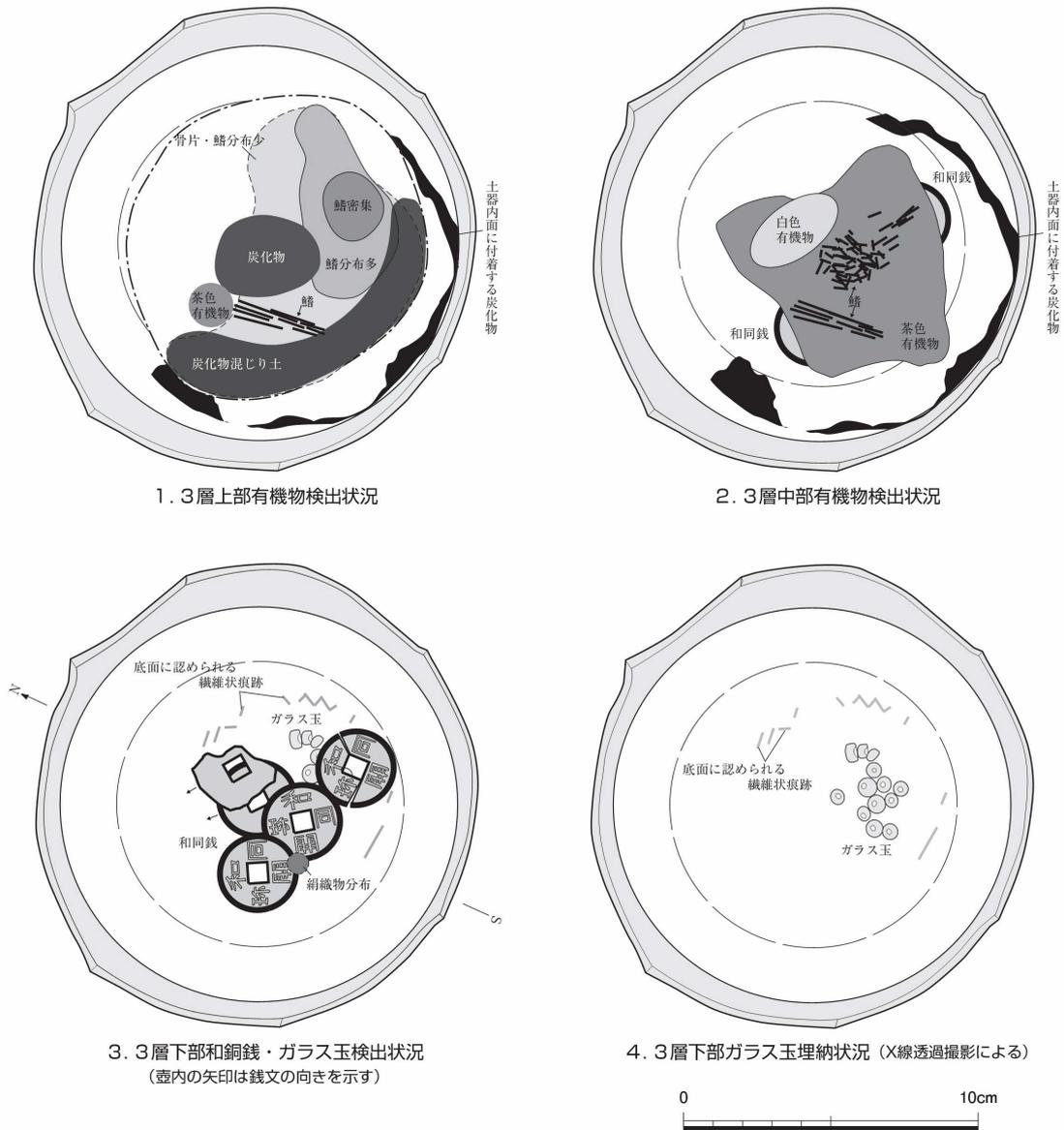


図219 鎮壇具の内容物 2：5

ガラス玉13点のうち、10点は銭の下方で孔を上に向けるが、残りの3点は、銭から離れて孔を横に向ける。土器底面には、白色の繊維状痕跡が認められる(図219-4)。
鎮壇具の納入順序 まずガラス玉と和同開珞が納められる。この際、これらが絹織物に包まれたか、あるいは上方に置かれたかという点はさらなる検討を要する。その後植物質のものが敷き詰められ、魚の頭部が納められる。内容物納入以後は、1層の土質が基壇築成土に類似することから一気に埋められたものと考えられる。壺内面に貼り付く炭化物は、土器が南寄りに若干傾いて埋められたことで、内容物全体が傾き、そのまま腐食したことに

よって付着したものであろう。

内容物 和同開珞は5枚あり、4枚が完形、1枚は腐食によって3分の2程度が残存する。このうち3枚が表向き、2枚が裏向きで、銭文の表裏は一定しない。銭文は、X線透過撮影によると隷書体で、いわゆる新和同である。

ガラス玉は13点あり、全て完形である。取り上げられた3点の寸法は、最大径が5～6mm、口径が2～3mm、厚さが2.5～4mmとなる。色調は白色～淡緑色を呈する。

魚類遺存体のうち、種同定の可能な資料は、フサカサゴ科Scorpaenidae sp.の方骨、角骨、前鰓蓋骨の3点である。魚類の骨片や鱗や鱗の破片を多数検出したが、ほ

とんどが細片で、同定可能な資料はわずかである。

方骨は下顎関節および方骨後角部の突起が、角骨は懸垂骨関節面が、前鰓蓋骨は後縁の棘が残存する。その他に、腹椎1点と射出骨2点を同定した。腹椎は、神経弓門の縁辺部のみが残存する。また、胸鰭が13本の軟条がまとまった状態で出土した。これらは種同定に有効な部位ではないが、出土状況から種同定された資料と同一種と考えられる。また、全長や標準体長のあきらかな骨格標本から、出土個体の大きさを推定すると、納入したフサカサゴ科魚類は、全長18～20cm（標準体長16～18cm）程度となる。

出土部位は、①同定された骨がほとんど頭部骨である点、②頭部骨よりも残りやすい椎骨が1点しか出土していない点、③胸鰭がまとまって出土した点から、フサカサゴ科魚類の鰭付きの頭部のみと考えられる。

茶褐色有機物については金原正明氏（株式会社古環境研究所）に分析を依頼した結果、それらが植物質で、小さな種実類を含むことが判明した。有機物は実体顕微鏡下での観察から、塊状、集合状、集絡状、網状有機物に分かれる。これらについては細胞形態の観察も試みたが種同定にはいたらなかった。それらがいかなる納入品であったかもあわせ、さらなる検討が必要である。

種実類は長軸で7mm前後の大きさで、両端のやや尖る長楕円形を呈する。一端に中の縫合部をもつ核（内果皮）がのぞくものがあり、核の表面には不整形な逆網目状の凹凸が観察されることからナツメ *Zizyphus jujube* Mill. 幼果の可能性があるという。（芝康次郎・山崎 健）

4 まとめ

興福寺南大門の発掘調査では、次の成果を得た。

造営前の地形 興福寺南大門は、中心伽藍が占地する丘陵の南端部に位置し、南方へと開く谷を埋めた上で基壇を築いている。この谷は中金堂院の東面回廊および中門の発掘調査で確認してきたものと一連であり、興福寺の造営にのぞんでこの谷を埋めるなど、大規模な整地をおこなったことが判明した。

基壇と建物 南大門の基壇は東西30.8m、南北16.6mで、これよりわずかに小さい規模の掘込地業をおこない、版築工法で築いている。版築層は最大で厚さ約2.6mで、層相から4つの単位に分かれる。礎石（花崗岩）は版築の

途中で据え付けており、創建時のものである。また、基壇縁付近の断割調査で確認した土坑SK9397～SK9404は一連の柱穴で、造営時の足場穴と考えた。

基壇上の建物SB9360は桁行2間×梁行5間で、東西23.1m（78.0尺）、南北8.9m（30.0尺）の規模をもつ。中央3間分は門の通路にあたり、その幅は14.2m（48.0尺）である。

鎮壇具埋納遺構の発見 基壇中央部で発見した創建時の鎮壇具埋納遺構SX9361は、興福寺の地鎮具・鎮壇具に新たな例を加えただけでなく、寺院の門における鎮壇の一例として特筆すべきものである。判明した納入順序でいえば、まずガラス玉13点を、次いで和同開珎5枚を須恵器広口壺の中に納めている。銭貨の次には茶褐色の有機物（植物質繊維やナツメ種実など）を納めている。最後には海産魚類（フサカサゴ科）の頭部を広口壺に納める。鎮壇具容器への魚類納入はかつて確認例がなく、茶褐色有機物の品目構成とともにさらなる検討が必要である。しかし古代寺院における地鎮・鎮壇の行為が、単に仏教的な儀軌のみで律せられたわけではないことが判明したといえよう。

金剛力士像の基礎 金剛力士像の基礎SX9362・SX9364は、被熱した転用石材（凝灰岩B）を台石とし、凝灰岩Bの基壇外装を撤去して以後の設置とみられる。SX9364の台石間に詰まった暗褐色土から採取した木炭の¹⁴C年代は、11世紀前半と12世紀後半～13世紀初めで、後者が文治3年の再建に近い。このことを重視し、SX9364は建治3年の焼失時にはすでに存在し、文治3年の再建以前の設置と考えた。

基壇外装の変遷 南大門の基壇外装には、確認し得たもので凝灰岩Bと花崗岩との2種類の石材を用いており、前者が古い。凝灰岩Bは南大門の使用石材では現存最古のもので、これを支えるI期裏込土は夾雑物を一切含まない。また、南階段SX9405の積土は凝灰岩Bの岩片を多く含んでいる。南階段には大規模な改修を受けた形跡がなく、凝灰岩Bの使用が奈良創建時まで遡る可能性を否定できない。花崗岩への改修は、上にみた金剛力士像の基礎SX9364の台石が凝灰岩Bの転用材であることから、文治3年の再建時と考えた。ただし、凝灰岩Bと花崗岩との間に、まったく別の石材を用いる時期があった可能性は否定できない。（森川）